

常▼竜の口一八尾島津天嶺▼那須与市一大阪
横野旭風▼昔れの水馬一明石富樫旭桂▼井伊
大老一西宮楊嶽水▼粟津ヶ原一彦根林田旭城
▼二〇三高地一神戸中相昇、相生浜本旭好
▼白虎隊一徳島内田欽水▼伽羅の兜一京都海
原旭瀧▼彰義隊一京都平井春嶺▼大楠公一神
戸柴田旭堂▼耳なし芳一西宮三浦連水▼曲
垣平九郎一高槻山崎旭萃。五時終演

竹下翠風演奏会

五月五日(休)夕六時東京西新宿安田生命ホ
ル、主催みどり琵琶本部、後援竹下翠風後援
会(有料)。戻り橋一吾妻江風、吾妻江雪▼
戦艦大和一竹下紫風▼大原御幸一吾妻江風▼
竹下翠風▼舟弁慶一鈴木流泉。外に竹下光子
作吟詠三をはじめ短歌朗詠二、短歌舞踊一、
朗詠三、剣舞一、新体詩一。(会主竹下翠風、
尺八田中栄重、舞踊振付水木歌寿栄)。

洲楓会琵琶演奏会

五月九日(金)夕五時東京日本箱第一証券ホ
ル、主催洲楓会本部(会長大館美江子女史)、
後援洲楓会後援会(有料)。(一組出演)敦
盛一竹田洲香。絃真泉洲佳▼重衡一立花洲華
▼異国の丘一神戸洲正。絃前田洲月▼接待一
金尾洲文▼湖水乘切一彼ノ矢洲友▼新曲紅葉
狩一稲垣洲玲▼羅生門一荒川洲博▼横笛一山
田洲鳳▼茨木一荒川洲帆▼常盤の前一桑名洲
聖▼(以下来賓)西郷隆盛一友吉鶴心▼新撰
組一若水桜松。八時半終演。

第七回筑前琵琶演奏会

五月十八日(日)十一時東京板橋区民会館、主
催東都旭会(有料)。お蝶夫人一藤巻典子、
絃旭瀧▼あつもり一中村旭輝▼大楠公一横山
旭季。絃旭瀧▼五條橋一太西旭千恵▼衣川一

藤巻旭星。絃旭彰▼茶道松風の曲一歌五人。
絃野口旭麗。点前上京社中▼吉野山懐古一石
田旭呂。絃旭瀧、旭彰、旭中。小絃旭章。笛
牧原▼堅田落一古川旭冷。絃旭陽▼王昭君一
初谷旭憲。絃旭麗▼舞扇鶴ヶ岡一内田旭章。
絃旭瀧▼対王丸一林田旭史▼北の庄一橋上旭
英。絃旭瀧▼壇の浦一黒田旭映▼伽羅の兜一
大野旭翠。絃旭瀧▼(横浜旭会)連奏曲大森
彦七盛長一井上旭慶、若林旭洋、石井旭良▼
湖水渡一吉島旭紅▼天の羽衣一歌三人。絃三
人。小絃旭陽。笛牧原▼唐人お吉一松元旭川。
絃旭瀧。笛牧原▼那須与市一藤巻旭陽▼若き
教盛一宮田旭峰。笛牧原▼(東京旭会)秋風
故郷の山一原島旭粧▼羅生門一会主藤巻旭瀧。

ラヂオ琵琶放送

五月一日(休)午後三時十分NHK。FM。湖
水渡り(全曲)外に五分間四絃合の手弾法一
押田旭努女史。

転居

仲川秀邦女史(〒164)東京都中野区本町三
一〇二二番都ハイツ新橋二〇五(電話三七五
一八四七番)に転居。

予告

○：筑前琵琶紅会演奏会 六月一日(日)昼一時
東京日本橋三越劇場。
○：ラヂオ琵琶放送 六月五日(休)午後三時十
分NHK。FM。恵林寺炎上一水藤五郎氏、
尺八伴奏三箇崑山氏。
○：京都琵琶協会六月例会 六月八日(日)昼一
時本部平井春嶺会長宅。
○：琵琶演奏会 六月八日(日)正午静岡市駿府
町県婦人会館、主催静岡県琵琶協会。

○：琵琶楽名流大会 六月十四日(日)正午東京
日本橋東京証券会館ホール、主催日本琵琶
楽協会(有料)。
○：大阪堺大鳥神社菖蒲祭に琵琶献奏 六月
十五日(日)昼一時、大阪琵琶同好会協賛。

新緑のあいだを爽やかに風が吹き
抜ける五月もいつの間にか過ぎて早
くも鬱陶しい梅雨期に入らんとす
六月の声を聞く。田植えて忙がしい
お百姓さんには恵みの雨であるが我々琵琶人
は楽器のお守りにまた一苦勞しなればなら
ぬ。琵琶の演奏会があると聞くと遠近を問わ
ず聴きに掛けるという一人の老フアンのお
方から演者の心掛けについて貴重な意見が
このほど京絃社に寄せられた。昨年十一月に
も京都の熱心な琵琶好きの方から演奏会につ
いての結構な一文を頂きその全文を掲載して
反響を呼んだが、今また琵琶人として注意す
べき数々の点を指摘されたのは有難いことと
ある。誠に力強いフアンであり同時に琵琶奏
者にとつてはこわい存在である。いつれ次号
にでもこの全文を転載して各位の御参考にお
供したいと思つてゐる。御期待を乞う。

昭和五十五年六月一日発行(非売品)
編集者 植村 寛
発行所 高槻市津之江北町一ノ三番
電話 〇七二六(七三六〇)五一番

琵琶 機関紙

京 絃

第三一二号 京 絃 社

建武の中興と 吉野五十七年



ばくす

元弘三年春、鎌倉幕府は、大塔宮護良親王
や楠木正成を討ちとるために大軍を派遣した。
太平記に三軍の合計八十万騎とあるのは話を
誇張したものであるが、正確な記録によれば
三軍併せて二十六箇国の兵に、関東軍を加え
て三十箇国の兵数で吉野山を攻撃したが、千
早の天嶽と正成の智謀によって施す術なく身
動きが出来ない。正成軍は小勢のため城を出
て戦うことは不利で、城に拠つて防戦して敵
軍をここに釘付けにしておくことが良策であ
り、そのために外部は空白で、朝廷に組する
人々は官軍として奮起するに絶好の機会を与
えられる。事実、この間に伊予、播磨に官軍
が旗を挙げ、後醍醐天皇も隠岐から帰られた。
幕府の警戒は嚴重であつたが、守護の佐々
木清高や一族の義綱らによつて天皇を誘導し、
元弘三年閏二月二十三日深更、荒天の波上を
五日後に舟は伯耆の大坂港に漂着、伯耆の豪
族名和長高はこれを迎え、自分の館には火を

放つて焼き払い、船上山に登つて行在所を造
営し、一山を城郭として守備を固めた。事前
に何等の連絡もなく突然の行幸であつたのに
突如の間これだけの処置がとれたのは素晴
らしいことであつた。
後醍醐天皇が船上山に登られたのは二月二
十八日で、翌二十九日には早くも賊軍が攻め
寄せたが、名和長高の奮戦によつてこれを退
けた。天皇は喜こばれて「長くて高いのは危
い。長年と改名せよ」と仰せられ、先づ左衛
門尉、次いで伯耆守に任せられた。

三日間の激戦に賊軍は敗れ、官軍は船上山
を根拠地として積極的四方を攻略し、三月
十七日には京の都を奪還すべく軍勢が向けら
れた。大將軍は千種忠顕、軍奉行は長年の弟
二人であつたが、六波羅勢の守りは堅固で、
播磨の赤松の攻撃も効果なく、更に千種忠顕
の軍も勝利を得ることが出来なかつた。
鎌倉幕府は天皇の船上山行幸を重大視して、

名越高家と足利高氏の二人を大将として大軍
を差向け、京都よりは二手に分かれて高家は
山陽道を、高氏は山陰道を進み、双方から船
上山を挟み討ちにする計画を建て、四月二
十七日二人の軍は同時に京を後に左右に別れ
た。間もなく高家は戦死したので指揮者を失
つた軍は戦意を失墜して京に引寄せたが、高
氏は丹波の篠村まで進んで進撃を止め、ここ
で寝返りを打つて官軍に加わり、各方面に連
絡して同調を求めた。そして四月二十九日、
願文を篠村八幡宮に納めたが、願文中に「我
が家再び栄え」るのを祈つてゐるのは、高氏
の本心が功利的であつた事を語つてゐる。
足利高氏は今や官軍として、逆に京を攻め
るに至つた。六波羅勢は南から千種、西南か
ら赤松、更に西北から足利の三方からの激し
い攻撃に堪え切れず、遂に京を放棄して東方
に脱出した。その時賊軍は、後醍醐天皇が隠
岐へ流されたあとに擁立していた光厳院を奉
じて行つた。六波羅は云はば幕府の出張所で、
その長官を探題と称した。探題は南北各一人
で、南の探題北條時益は退却の途中に戦死し、
北の探題二十八才の越後守北條仲時が全軍を
まとめて番場の宿まで来たが、ここは山の中
の凹地で戦術上誠に不利な地勢である。見れ
ば前方には錦の旗一流、軍勢五、六千、要塞
堅固で待ち受けている。これは後醍醐帝の御
叔父五辻宮が統率する官軍で、疲れ果てた六
波羅勢には之を突破すること到底不可能と見
た仲時は、部下を集めて官軍に降伏する事を

命じ、自刃して果てたので、一同之れに感動して自害した。蓮華寺の住職はその菩提を弔ったが、それによれば総員四百三十余人で、年少者は隠岐の守護佐々木清高の次男泰高十八歳、三男高秀十七歳、四男永寿九十四歳、隅田能近十六歳、同国近十七歳、問註所阿子光丸十四歳など未だ若木の桜花が命を落とした。時に元冠三年五月七日。



「新古今集歌人たち」の中から

さきごろ、京都冷泉家の秘蔵文書類の中に定家自筆の家集「拾遺愚草」「明月記」及び俊成、西行、定家の三歌人真筆の色紙の掛軸が見つかつた。

山ふかみ松のあらしはききなれて

さらにみやこや旅心ちせん(俊成)

しのばれんことにもなき自らの

たびたび袖にすみのつくらん(西行)

松風にうちふる波の音はして

こほらぬいけの月にこほれる(定家)

藤原定家は和歌の輝きを一身にあつめて登え立った天才である。定家の父、俊成をはじめとして、西行、後鳥羽院、式子内親王、藤原良経、慈円、寂蓮、家陰、俊成卿女、宮内卿、いづれも歌の上手で眩しいばかりの個性

の持ち主である。しかし定家の存在は群星の中の明星と言うべきであろう。

定家 一一六二応保二年俊成四十八才の時生まる。

一一八〇(十九才) 明月記

一一一六 家集「拾遺愚草」

一二四六(仁治二年(八十才)歿

新古今和歌集(春下から五首)の残香の心を

撰政太政大臣

よし野山花のふるさと跡絶えて

むなしき枝に春風ぞ吹く

。庭の八重桜を折らせて惟明親王の許に遣はしける 式子内親王

八重桜句ふ軒端の桜うつろひぬ

風よりさきにとふ人もがな

。五十首の歌奉りし中に湖上花を

宮内卿

花さそう比良の山風吹きにけり

こぎゆく舟のあと見ゆるまで

。題しらず 西行法師

ながむとて花にもいたく馴れぬれば

散る別れこそ悲しかりけれ

。雲林院の桜見にまかりけるに皆散りはててわづかに枝に残りて侍りければ

たづねつる花もわが身もおとろえて

後の春ともえこそちぎらね

西行 一一八一—一九〇北面の武士(佐藤義清)二十才で出家各地を旅行す「山家集」を残す

「西行」(琵琶愛吟集卷之一)

康治二年の秋の末 はかなき憐れ身にこたえ 夕の風に散る葉より 脆くも世をばあぢきなみ……(略)

月を見て心浮かれしにしへの

秋にも更らにめぐり合ひけり

一首の和歌を詠み出でて 時雨るる空の定めなく 又も旅路につき給ふ

行く春を川のほとりでおくり、八百年前の王朝の末を偲ぶとき、落花は舞って水に散る。

行く春を川のほとりでおくり、八百年前の王朝の末を偲ぶとき、落花は舞って水に散る。



(四、三〇) 鴨水記

五絃閑話(九)

水藤 五郎

琵琶の魅力

琵琶が他の邦楽と比べて、今日、弱い立場にあるのは何故なのか。例えば、NHKの放送番組予告を見ても、四月に琵琶の放送はないようだし、邦楽雑誌にのっている邦楽番組表に琵琶の文字は見あたらない。これは演奏会でも同様で、東京の主ホールや公会堂の催し物予告表に琵琶の文字は全くなかったと云っている。

端的に云えば、琵琶人口が教稀であるのと、たまたま四月に演奏会や放送がなかったから

なのであるが、それにしても、やはり琵琶を見たり聴いたりする機会がないのに変りはない。結果、琵琶の魅力がないからなのだが、毎々述べる如く、他の邦楽と琵琶がそれ程魅力の有無に差があるとは思えない。則ち、本質的には琵琶も三味線も等も邦楽に変わりはないのだし、古典的なもので、且つ、伝統的なものなのである。が、これは琵琶人の立場なのだが、では何故琵琶だけが古めかしい、判らない等と敬遠されてしまうのか。

この処、能楽ブームがある。一時、若者の心をもとらえ得ることが出来た津軽三味線のブームは去つたが、日本の音に目醒めさせる原因となつた功は大きい。今の能楽ブームはそれとは違つて、静かではあるが、その求めるものは日本の美、それも中世的なものである津軽三味線のあの哀愁に満ちた音色と、反面津軽の荒波を想わせる力強さに、今日失

いかけた心の自然を取り戻したのであった。琵琶もこの意味ではチャンスはあった。津軽三味線が日本の北ならば、薩摩琵琶も日本の南の果てを故郷としている。津軽三味線も薩摩琵琶も同様に力強さを武器にする。共に一の糸を叩く奏法を持ち、長い合の手で、聞く者を釘付けにする。津軽の風土と薩摩の風土は南と北、いや、北と南と正反対だが、その求めている姿は不思議なほど共通している。最近の津軽三味線の流行は、津軽地方の表

門琵琶が使われることを私達はよく知っている。テレビドラマ「風の隼人」もそうであった。この様にいろいろな意味で同じ魅力の要素をもち乍ら、琵琶が津軽三味線ほどにブームを生じさせることなく、沈滞しているのを余儀なくされるのは何故なのか。まづ、津軽との勝負に琵琶は敗れてしまったことになる。次ぎに、今日の能楽ブームとはどの様になるのか。能のブームは決して津軽三味線の様に、大衆的なものではない。しかし、静かなブームであるからこそ静寂を目指す能の様式美に合っているのである。能もその歴史の古さから、とかく現代に於ては理解されないものと思われる。確かに、語を聞いても、その詞章を容易にくみ取ることが難かしい。言葉の芸能に於て、意味が理解できないことは致命的なハンディに他ならない。

だが、能楽は滅びないばかりか、多くの支持者を未だに得ている。よく考えてみると、能を構成しているものは、謡の詞章だけでなく舞があり、それに伴う能面と衣裳の美しさ、謡を型作っている節調と声音、それを伴奏する楽器群等々と多くの魅力なのである。詞章が判らないと云うハンディよりも、能面の持つ神秘感、衣裳の美しさも出す時代感等々、その魅力を挙げると切りがないのである。或るハンディがあつたとしても、他の持つ魅力で補足してしまつてゐる。長い伝統によって高められた魅力に対して多くの人々が敬意を抱くのは無理はない。能

は同じ平家物語を主題とするが、琵琶以上に平家物語風である場合がしばしばで、この点でも琵琶は一步も二歩も能楽に負ける事になる。能楽師は能を演ずる人を意味する。琵琶師のそれと同様であるのは、言葉の問題としておもしろい。

琵琶は語り物音楽であるという。さすれば、劇的でなければならぬし、その点でも、能が猿楽と云われる段階から、音楽劇であつたことと共通する。いや、共通するのでなく競合するのである。どちらが内容を判らせるか、人物を表現し得るか、能楽は舞を共にし、琵琶はその点で一步ゆずるのではあるが、琵琶と云う楽器を持って、全国を行脚出来る利点はそれなりの魅力でもあつたろう。

今日、能楽ブームの主な要因は、神秘的な美しさと幽玄の世界を偲ばせる静寂さが、あの華やかな昭和元禄も夢と化して、不確実な低迷迷の時代となつた現在に、割合いと理解されるためではないかと思ふ。琵琶師にとって、今後なすべきことは、能楽師がたどつた道を知ること以外ならない。かつて、永田錦心師は薩摩琵琶に謡曲を取り入れて、多くの詞章を作曲した。今、耳にする錦心師の至芸の底に流れるのは、能の典雅な美である。呂の声の力強さと品位は、謡曲のそれであるようにも思える。歴史はくり返すのだから、琵琶界での謡曲研究と能の美の研究が望まれるのではないだろうか。



我が道を行く 六十五年(七一)

西郷 天風

回顧すれば昭和十四年頃から夥しい援蔭物資が、仏領印度支那を経て重慶へ送り込まれる所謂、仏印ルートが問題化し、同時に南支の要衝南寧周辺における戦況が重要視されるに至って、私は南京大陸新報の委嘱もあり、其方面の視察がたがた皇軍琵琶慰問に出發したのが昭和十五年九月央であった。就ては台湾から五妹田君を連絡員に仕立てて、松山飛行場から廣東に直行、愛群ホテルの軍用宿所に投宿。次いで淀泊司令部のある江浦港に立寄り、そこで軍用船に便乗の手続きに数日を経て、かつて我軍の上陸地点、北海の湾の入口に近づくと、本船からハンケに移され、湾内に至れば左手水に浸ったジャングルを興味深く眺めること一時間位にして堆車嶺の港に着き、ひとまづ此処の停泊司令部を訪れて所定の手續を踏み、交通車に便乗して約一時間後欽州市の軍宿舎に投宿した。

この都市は、欽江の流れに添った繁華街であり、この入口でいち早く眼についたのが、「欽果一番乗あんまき屋」と書いた屋上の看板であった。南支那の奥地に来て、この様な

たくましい日本商人の商魂にふれた時の感激は何とも云えぬ心強さを覚え、朗らかさ、とても云う様な気分、故国を遙々と遠く離れた未知の都会のめづらしさにひかれ、あてもなく市内を抜渉した。そして計らずも武漢攻略の従軍で知り合った一士官に邂逅し、欽江の対岸にある軍の設営に案内され奇偶の喜びを分かちながら、私は初めてあん巻なる菓子を馳走になった。又かつて武漢攻略戦の機銃手だった兵士が此処の将校宿舎の炊事当番として働いており、お蔭で戦時食とは思われぬ程の御馳走が毎度私の食膳を飾るのであった。亦南寧へ出發の前日、旧知の映画技師佐伯氏が撮影班に加わって、此の宿舎にやって来たのも奇遇であったが、お互いに落付いて話を

しない私達は、積荷の少ない車を選んで便乗を頼むのだが、中々そんな都合のよい車に出逢うこともなく、遂に三日目になってしま



婦人と琵琶

樋口 主水

テーマが大きいので、大理論でも出ることと思われませんが、別に定義づけたり、理屈を並べようとするものでないことを、最初にお断りして置きます。気のついた現象を

南寧より国境の方が重要地点であることを知らせてくれた。そこで私達も初期の方針である南寧行を変え、仏印と南支の国境方面へ行くことにした。

その日の夕刻、南寧と仏印国境方面への分岐点に当る三叉路に設けられた軍用宿舎に着いたので、私達は一応この宿舎に泊ることにして、彼の士官一行とは決別したのであった。因みに此の士官とは三ヶ月後の仏印ハイフオン港でも偶然邂逅、又しても上海直行の軍用船に便乗の手続をお願いし、お蔭で僅か三日の行程で上海に帰港することが出来たのであるが、海に残念な事に其の所属の隊も姓名も聞き洩したまま、遂に再び相逢う機会を失ってしまった、痛恨の限りである。

尚、私の従軍証は参謀本部直属のもので、其の地域も期間も戦争の続く限り無制限のもので、佐官待遇であったのは幸運だった。

最近婦人の琵琶鑑賞が目立ってきました。私の場合です。で、それを取上げてみました。最近といっても、今年はまだ四月になったばかりゆえ、昨年のことになります。出演の内、大きなものだけ拾ってみますと、三月、いわき市の天風会、女性七十パーセント。五月、いわき赤井婦人会。六月、相馬女子高校卒業生総会。八月、富岡女子高校生の一部。六月、檜葉中学校、生徒の外婦人会で老人会員を琵琶聴く会に招待。福島テレビから取材に来たりして、会終了後婦人会員二十数名が会場から五十キロほどある拙宅まで送って下さった。十月、原町中学校PTA、婦人が四分の三。十一月、福島大学で音楽史と音楽理論の女の先生が女子学生を連れて来られた。十一月、いわき市、平第二婦人会。今年に入り二月、相馬女子高校卒業生、鹿兒支部と、現在申し込みある分では富岡女子高校の五月、同月いわき市、平第一及び第三婦人会。以上無論演奏会の内三分の二は男子組だが、婦人に暇が出来たのでしょうか。これから得た教訓ですが、婦人の方が深く掘りさげて聴いてくれること、琵琶と云う派手に宣伝されな

俱利伽羅古戰場

辻 旭城



ものが多く、琵琶普及は婦人層の開拓と云うことになるでしょう。

貴紙に、水藤氏が聴衆を動員する法、琵琶普及法、演奏者の心構え等々を毎号書かれてるのを拝見し、どれも必要なことばかり、賛成です。しかし琵琶普及は前途多難なものがあります。頭の痛い問題であり、思うように進展しないのが実情で、気長く種々研究することにしましょう。

繰り返しになりますが、婦人が琵琶に精通したら、子供に伝わる早道になるかも知れません。少なくとも父親より母親の方が、子供に対する限り影響力が大であります。婦人と琵琶、喜ぶべき傾向と思ふ筆をとりました。

寿永二年(一一八三)木曾義仲が平家を討つとき、願文を奉って戦勝を祈願したという護国八幡宮の社殿は小高い丘上にあり、立派な建築で石動城主前田利家も帰依していた。俱利伽羅峠は加賀と越中の国境礪波山にある。木曾義仲が牛の角にたいまつを結びつけて、平維盛の率いる七万余騎の大軍に向けて放ち、大勝したという古戦場である。

平家の軍勢が深谷に陥って惨敗したことは

地獄谷の名に残され、五、六月の雨期の頃ともなると、谷底からむせぶような恨みのうめき声が聞こえてくると伝えられる。附近には源氏が峰の戦跡や、東へ下ってゆくと巴塚・葵塚など、義仲愛妾の塚がある。山頂の「猿が馬場」は平維盛が本陣を布いた所で、猿堂の前に芭蕉の「義仲の寝醒めの山や月かなし」の句碑が建てられている。

義仲は治承四年(一一八〇)以仁王を奉じて平氏追討の兵を挙げて入京し、頼朝、平氏とともに全国を三分したが、後白河院と反目、義経の手により近江国粟津で敗死した。

義仲討死後、頼朝が義仲の長子清水冠者義高誅殺の企を知った政子は、これを助けんとひそかに鎌倉から逃がしたが、人間川畔で追手の堀藤次によって誅殺されたことは、「吾妻鏡」に記されている。鎌倉に在って義高の死を知った頼朝の長女大姫は、恋情の破綻から病となり、政子の真心こもる愛情にも報いることなく死んでいった。過般のNHK大河ドラマ「草燃ゆる」の前半を彩った感激の一場面であるが、当時源義経が大陸に渡ってジンギスカンとして生まれ変わったという伝説に似た話は実に多い。平将門もその一人であるが、「草燃ゆる」のファンで義高、大姫に憐愍の情を持つ読者諸氏のために、生存説として各地に伝わる伝承を書くことにする。

東京都世田谷区大蔵の清水家の地所内に「大将塚」がある。天明年間にこの塚を発掘して古刀や砂金を発見したが、古瀬戸の壺一個を残し、その他は元埋められた。壺は当時西の丸の侍医西青原検校に譲られ、検校は天保八年八月十二日、塚上に「源義賢墳」の石碑を建てた。検校の調査によって清水家は、清水冠者義高の子孫であることがわかった。

頼朝は正治元年(一一九九)相模川の架橋落成式で落馬し、それが原因で死亡した。頼朝の死後、頼家が將軍になつたが若くして殺され、続いて実朝が將軍に立つたが鶴岡八幡宮で殺された。鶴岡八幡宮は、康平六年(一一六三)源頼義が奥州の安倍貞任一族を征伐する時、山城国石清水八幡宮の神霊を由比、鶴岡に勧請したのが起源であると伝えられた。頼朝は、鎌倉に幕府を開くと共に多くの神社仏閣を造ってその地を確保しているが、中でも鶴岡八幡宮は由緒を重んじ深く尊敬した。上宮社前、参道石段の傍らに「隠れ銀杏」と称する樹令数百年を経た老木がある。これは承久元年(一一一九)に、右大臣実朝が鶴岡八幡宮の別当公暁のために殺されたことと伝えられる。公暁は、源二代將軍頼家の三男で、頼家が北條氏に殺されたため鶴岡八幡宮の別当坊に入り、仏に仕えて法名を公暁と称した。当時北條氏は幕府の実権を握らんとして策略を弄していたが、まづ公暁に、將軍実朝と執権義時を親の仇と説き伏せて、源氏の系統を断つ陰謀を企てた。

その頃、実朝が右大臣に任ぜられ、その拜賀の儀を八幡宮の社頭で行なうことになったので、公暁はこの機会に父の仇を報ずると共に將軍の地位を望み、後援者として乳母の夫三浦義村一族の勢力を期待した。そして承久元年正月二十七日、実朝が拜賀の帰途公暁は石段脇の大銀杏の蔭にかくれて実朝を刺殺し、続く源仲章を義時と誤認して殺害した。事件が終って、公暁は三浦義村に対し將軍地位について今後の協力を要請したが、三浦氏はこれに応ぜず、却って公暁を殺させた。時に公暁は十九歳の若さであった。斯くして源氏の正統は絶えたのであった。



山崎旭萃女史叙勲

山崎旭萃女史は多年にわたり芸術に貢献した功労大なりとして、今回勲五等に叙し瑞宝章下賜の御沙汰を受け、五月十五日宮中に参内してこの栄誉に浴されたのは誠に目出た限りである。衆知の通り山崎女史は琵琶界の重鎮で、筑前琵琶橋の宗範であり、また大和流琵琶の創始者として全国数百の門下育成に寧日なく東奔西走の活躍を続けられていた。琵琶界を代表して心からお祝詞を申し上げ、併せて今後益々御奮闘を期待する。

北国の春



野山の残雪も漸くなくなつて、空の青さや陽光にも明るさが加わってくる、木々の芽も日増しにふくらみを見せてくる。内に蓄えた力が自ずと滲んでくるように思えない充実感が漲るのである。冬の間にすっかり葉を落としてしまふ雑木はもろく、青々とした針葉樹もまた新しい芽吹きの様子を見せている。木々の芽の形や色や、大きさはその種類によつて千差万別だが、芽吹き時期も一様ではない。それだけに、芽吹きあとの多彩な北国の春を思う時が、最も充実した一刻であろう。(四・二〇 函館 西村峽水)

醒醐寺琵琶献奏 四月二十日(日)京都市伏見区の総本山醒醐寺の開關結願法要祭事に大阪琵琶同好会協賛の琵琶献奏会が午後一時から参集殿で開催された。千代の寿一作花旭友、青の洞門一矢野旭信、曾我兄弟一水谷旭甫、那須与市一松本旭勇、城山一川村旭幸、湖水渡一多和綾子、桜一鈴木、青柳ほか、井伊大老一天津八千代門下数名、羽衣一辻旭城、隅田川一石橋旭嶺、吹雪の敵一田中敷水、粟津の露一中島旭穂、加羅の兜一天津八千代。外に詩吟、日舞、剣舞、浪曲、奇術などを数番。

薩摩琵琶悠絃会の研修会 四月二十七日(日)屋東京中野区大和センター。門琵琶・伴流謡切連弾一茂良、錦幽、錦道、似蛾一伊藤茂良、滝口入道一山崎錦幽、西郷隆盛一中村洲心、敦盛一八東一峰、詩吟一後藤雪水、川中島一天羽謙、太田道灌一木村香詠、鉢の木一軽部岳瑞、未練西行一若宮旭登、謎語もどき一坂本錦道、弾法手数一普門史城。外に来賓北村一城。小宴の後五時半散会。

第二十四回神武館道場発表会

四月二十七日(日)朝十時半神戸文化ホール、後援日本吟詩舞振興会ほか。吟詠、朗詠、剣舞、舞数番の外琵琶島回願(立方十三人)、島原の紅梅(立方二十六人)の二曲を三浦蓮水女史が演奏、千八百人収容の大会場も超満員の盛況で万雷の拍手が堂を動がした。

京都琵琶協会の筍欵賞会

四月二十九日(休)屋一時京都向日市の会員梅原旭瀧女史宅で四月例会を兼ねて開催。例の通り会員数氏が研修演奏を展開し、夕刻名物筍(たけのこ)料理で一齋を傾けつつ欵談に

時の移るを知らず楽しみ七時半散会した。山城名物筍は他所では味わえぬ美味で、毎年この時期には梅原女史邸で例会を開くのが恒例となり、この日も青葉若葉句う好天に恵まれ、梅原女史の心づくして掘りたての新鮮な筍料理を賞味したが、その香おりや舌さわりなど他に類を見ない珍味を満喫した。(出席者)馬場鴨水、林旭朋、戸倉旭嶺、嶽水、田中敷水、梅原旭瀧、矢吹旭美津、安住旭康、牧南水、荒木旭媛、桜井旭富、水内煖水、平井春嶺、植村真水、(来賓)山田繁子、村山旭嬢両女史。

第十八回赤心流春の大会

四月二十九日(休)朝九時半静岡市駿府町の県婦人会館にて首記吟詠大会が開催され、赤心会歌を序奏に百数十番の吟詠が数十名の会員によつて披露され盛況であった。尚四月三日静岡浅間神社、同十七日久能山東照宮に於て例年通り奉納吟詠大会が開催された。因みに赤心会では毎年春は吟詠の会、秋は琵琶演奏の会が開催される。(会長赤心流鶴翁氏)。

第三回琵琶名流会

五月五日(休)十時半神戸市兵庫民会館九階ホール、主催日本琵琶協会の関西支部(支部長山崎旭萃女史)(有料)。姫百合の塔、大坂駒栄旭良、安宅の関、神戸半田旭甫、多田旭嶺、屋島回願、大坂川上琵琶、城山一四日市山本嶺舟、若き敦盛、明石大塚旭品、坂崎出羽守、京都中島旭穂、新撰組一京都木下皇水、西郷隆盛、松山白石旭優、大物の浦一大阪高千穂旭楓、川中島一神戸田中敷水、本能寺一大阪木庭旭山、衣川一明石大塚旭寿、戦艦大和、神戸滝沢花水、別れの盃一神戸大迫旭山、玉藻の前(尺八伴奏)一大阪尾山旭瑞

日本芸術琵琶協会の四月例会

四月二十日(日)屋東京文京区大塚六丁目目の貸席京屋で開催。お江戸日本橋・門琵琶・伴流謡切第五弾法一錦幽、石童丸一鈴木好水、勸進帳一内田隆章、城山一曰比錦庵、詩吟石童丸一奈佐喜八、秋海棠一青木早水、乃木将軍一山崎錦幽、幻想瀧陽江一西村錦風、俊寛(下)一坂入晴峰、漢詩二題一伴旭友、敦盛一高田栄水、大原御幸一鈴木流泉、青山幡磨一杉山旗水。以上研修演奏のあと日比帽子さんの茶道御手前の饗応を頂き小宴の後六時半散会。